

# 令和7年度 大阪市立新異中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

## 1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

### 2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

## 3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

## 4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

# 令和7年度 大阪市立新異中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

## 1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)		平均IRTスコア 理科
			国語	数学	国語	数学	
3 年	学校	77	42	29	12.5	23.2	432
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2	489
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

## 2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会※	数学	理科※	英語	国語	社会※	数学	理科※	英語
3 年	学校	91	51.4	39.1	39.6	34.4	41.6	11.9	9.4	17.3	22.1	12.2
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4
2 年	学校	61										
	大阪市	—										
	大阪府	—										
1 年	学校	63										
	大阪市	—										
	大阪府	—		—		—			—		—	

※ 1年生の社会・理科については、「大阪市版チャレンジテストplus」として実施

※ 1年生の理科は物理的領域を選択

※ 2年生の社会はA問題を選択

※ 3年生の理科はB問題を選択

## 3 大阪市英語力調査（GTEC）

学年 実施月日		生徒数 (人)	読むこと 【リーディング】	聞くこと 【リスニング】	書くこと 【ライティング】	話すこと 【スピーキング】
			(スコア)	(スコア)	(スコア)	(スコア)
3 年	学校	91	87.0	85.3	91.0	65.2
10月	大阪市	—	117.4	110.2	146.4	98.4

## 4 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

学年	生徒数 (人)	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトル ラン	持久走 男子1500m 女子1000m	50m走	立ち 幅とび	ハンドボール 投げ	体力 合計点
	61	(kg)	(数)	(cm)	(点)	(回)	(秒)	(秒)	(cm)	(m)	(点)
2 年 男 子	学校	29.35	23.80	46.10	52.89	77.00		7.79	176.83	23.75	43.44
	大阪市	28.65	26.89	43.47	51.80	80.14	425.49	8.06	195.02	20.28	41.69
	全 国	28.95	26.09	45.12	51.64	78.82	409.25	8.00	197.51	20.74	42.20
2 年 女 子	学校	23.25	20.31	49.88	39.85	56.27		8.97	150.52	11.46	47.41
	大阪市	23.12	22.70	46.32	46.59	53.12	318.64	9.03	166.76	12.20	48.14
	全 国	23.15	21.70	46.99	45.74	50.60	309.66	8.97	166.44	12.43	47.58

令和7年度 大阪市立新興中学校のあゆみ  
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

○全国学力・学習状況調査結果

＜国語＞

全国と比較して、平均正答率が12.3%低かった。全体的に全国平均を下回っているが、その中でも特に『「思考力、判断力、表現力等」A話すこと・聞くこと』の分野の正答率が、全国平均53.2%と比べて大きく差があった。また、問題形式においては「記述式」「短答式」の問題が特に無答率が高く、苦手傾向にあるとみられる。一方で、『知識及び技能「(1)言葉の特徴や使い方にに関する事項」』の問題において、全国平均正答率61.0%を1.3%上回っていたことから、事象や行為を表す語彙については理解度が比較的高いといえる。

＜数学＞

全国と比較して、平均正答率が19.3%低く、「無回答率」が12.6%高かった。「A 数と式」「B 図形」「C 関数」「D データの活用」の4つの分野ごとに比較してもほぼ同様であったが、その中でも「A 数と式」がもっとも全国との差が大きかった。また、問題形式ごとにみると、どれも全国より正答率が低い中で、「選択問題」では全国の74%、「短答問題」では全国の58%、「記述問題」では全国の51%の数値になっており、答える内容が多く複雑になるほど全国の平均正答率との差が開く傾向がみられた。以上のデータから、基礎的な知識や計算等の基盤と、問題に取り組む態度に課題があるといえる。

＜理科＞

全国と比較して、平均IRTスコアが72ポイントと大きく下回っていた。その中でもIRTバンド1に該当する生徒は全体の約20%、2に該当する生徒は全体の約41%と、半分以上の生徒がIRTバンド2以下を占めていることがわかる。また、問題形式ごとにみると、全ての問の正答率が全国よりも低く、「気圧の知識が概念」の問いでは全国の24.8%、「探求に関する振り返りの表現」では全国の20.4%と大きな差が見られ、どちらもIRTバンドの4と3に該当する問いである。正答率が全国と比べ12%以上の差がある問いをみると、第一分野に該当する問いが大半を占めていた。以上のデータから、基礎的な知識に限らず、グラフの分析力、結果からの考察力が不足しているといえる。

【今後に向けて】

＜国語＞

さまざまな語彙に触れ身につけさせるために定期的に授業で新出語彙の問題に取り組ませる。また、文章を読み、自分の考えを文章にすることへの苦手意識を拭うため、細かな段階を踏み文章を読んだり書いたりすることに慣れさせていく必要がある。

＜数学＞

基盤づくりのために、分割授業の継続による個別指導の充実を図る。また、取り組む態度をはぐむために、生徒同士での対話的な授業づくりと、生徒が自分自身の適切な課題を把握できるようなフィードバックを行う。

＜理科＞

基礎的な知識の定着には時間がかかるため、定期的な小テストの実施や課題の提出等を継続的に行う必要がある。また、実験や探求課題をテーマに、生徒が主となり、疑問を抱くような授業展開を目指す必要がある。

○中学生チャレンジテスト(3年生)

【成果と課題】

＜国語＞

平均点は府と比較すると－12.8点であった。学習指導要領の内容別の平均点は、すべての項目において大阪府平均に達していないが、特に「読むこと」の項目については－4.7点と差が大きく表れている。また評価の観点別平均では、「思考・判断・表現」の項目が－9.5点と大きい。本テストの設問の中で、大阪府平均を上回ったのは「漢文の読み方として適切なものを選択する」という設問のみである。一方、「現代仮名遣いに直して書く」「本文中の言葉を現代語に直したときの意味を選択する」という問いが、特に府平均と差があったことから、古文を読み内容を理解することに苦手意識がある生徒が多いと考えられる。

＜社会＞

問題分野によっては大阪府平均正答率を上回るものがあった。知識に関する記号問題・短答問題に関しては取り組むことができていた。大阪府平均に比べて無回答率が高い結果となった。無回答率の高さが大阪府平均との差につながっていると考えることができる。特に、資料から読み取る問題や記述で答える問題の無回答率が高かった。

＜数学＞

平均点は府の平均点と比較したときに－14.3点であった。観点別でみるとどの観点も同程度の得点率であったが、単元別でみると「図形」と「データの活用」の単元で他単元以上の課題がみられた。「図形」の得点率は府平均－19.0ポイント、「データの活用」の得点率は府平均－16.6ポイントであった。この2つの単元で共通する点は数学的な用語を用いた問題である。用語の意味を理解し活用する力が求められるため、数学的な用語の知識の定着や使用が具体的な課題として挙げられる。

＜理科B＞

大阪府の平均点より11.6点低い結果となった。得点分布によると10点～24点に分布している生徒は29名おり、これは全体の38.1%を占めている。一方で50点以上をとれている生徒は17名で、全体の22.3%と低い値を示している。設問別結果における大阪府と本校の正答率を比較したところ、生徒率が24%以上低かった問いの全てが一年生で学習した分野であり、そのうち第一分野の化学と第二分野の地学に集中していた。また、生徒率が10%以下を示した設問は、「水溶液の性質」「音のしくみ」の単元が該当しており、この単元も一年生で学習する分野であった。以上の結果から、すべての分野において基礎的な知識が不足しており、その中でも一年生で学習した内容が定着していないことがわかる。

＜英語＞

大阪府の平均53.2よりも11.6点低かった。しかし、前年度の平均と府平均の差を比較すると「聞くこと」の力が前年度－3.8点だったが、R8本年度は－3.1点で0.7点上がった。

【今後に向けて】

＜国語＞

- ・学習指導要領の項目「読むこと」の設問の得点率を上げるため、さまざまな文章を読み慣れさせ、内容理解につなげていく必要がある。
- ・古文に苦手意識がある生徒が多いため、古文に触れる機会を増やし、問題を解くために必要な知識の定着を図りたい。

＜社会＞

- ・入試に向けて、基本的な用語の定着を小テストなどを通して行っていきたい。
- ・授業でも、資料の読み取りや生徒同士の対話を通して、資料を読み取る機会を増やしていきたい。

＜数学＞

授業や課題において、数学的用語の意味を確認したり、生徒が用語を使って説明したりふりかえったりする機会を増やすことを目指す。

＜理科B＞

一度学習した内容を振り返る機会を増やすとともに、より理解を深め、知識を定着させるために生徒にアウトプットさせる授業を行うことが必要である。

＜英語＞

「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の平均点はどれも大阪府平均を超えていないため、今後は3領域のなかで1つでも平均点を超えられるようにしていくことが重要である。

令和7年度 大阪市立新興中学校のあゆみ  
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

○大阪市英語力調査(GTEC)

【成果】

「読むこと」「聞くこと」「話すこと」「書くこと」のすべてのスコアで平均を大きく下回るという結果になった。

【課題】

基本的な文法事項、頻出事項が高い単語の定着率が非常に低いことがデータから読み取れる。そのため、今後それらの定着を図れるようにしていきたい。

○全国体力・運動能力、運動習慣等調査(2年生)

【成果】

『握力』、『長座体前屈』、『50m走』は大阪市比較して、男女ともに高かった。また、この3種目は全国と比較しても高い結果となった。しかし、『上体起こし』『立ち幅跳び』は大阪市と比較して、男女ともに低い結果となった。

『反復横跳び』『ハンドボール投げ』は大阪市と比較して、男子は高い結果となり、『20mシャトルラン』は大阪市と比較して、女子は高い結果となった。

【課題】

『上体起こし』『立ち幅跳び』は大阪市の平均の差が大きく、「筋力・筋持久力」「敏捷性」の強化・向上が課題である。

○中学生チャレンジテスト(2年生)

【成果と課題、次年度に向けて】

＜国語＞

【成果】

【課題】

＜社会＞

【成果】

【課題】

＜数学＞

【成果】

【課題】

＜理科＞

【成果】

【課題】

＜英語＞

【成果】

【課題】

○中学生チャレンジテスト(1年生)

【成果と課題、次年度に向けて】

＜国語＞

【成果】

【課題】

＜数学＞

【成果】

【課題】

＜英語＞

【成果】

【課題】

＜社会＞(チャレンジplus)

【成果】

【課題】

＜理科＞(チャレンジplus)

【成果】

【課題】